

音調からみた福岡市博多方言の感情表出文

A Pitch Contour on Exclamations in Hakata Japanese

坪 内 佐智世

Sachiyo TSUBOUCHI

国際共生教育講座

(平成25年9月30日受理)

1. はじめに

福岡市博多方言の詠嘆文「夕日のきれーかー（夕日がきれいだなあ）」では、述語句「きれーか」(「¹」の直後からピッチが下がる)のアクセントが実現せず、軽く咽頭化を伴って高く平らなピッチ「きれーかー」が現れる（高いピッチを上線で示す。最後の音節は長音化する傾向がある）。この音調は、話者の感覚を一方的に述べる態度として機能し、いわゆる詠嘆文にとどまらず話者の意見や判断を示す文にも現れる。本稿では、このタイプの文について記述、考察する^{1,2}。アクセントの位置は必要に応じて「¹」で、関与的な音韻句を「²」で、その中で高く現れるピッチを上線で示す。

- (1) (来週の出張について「日帰り?」と尋ねられて)

いや、¹ [いっばくする] (いっばくする)

(いや、一泊する。)

- (2) (楽しみにしていたイベントのためにわざわざ福岡から東京まで行ったのに、安くおさえようと日帰りの予定にしていたため、帰りの夜行バスの出発時刻に合わせてイベント終演 30 分前に会場を出ざるを得なかった、という話を聞いて)

私やったら、ぜったい¹ [いっばくする]。

(私だったら、ぜったい一泊するけどなー。)

本稿では、この高く平らなピッチを話者の感情、感覚を一方的に表出する機能を持つ「感情表出イントネーション」としてとらえ、このピッチタイプの文を「感情表出文」と呼ぶ。

¹ この方言の動詞句、形容詞句は一型で、いくつかの韻律外モーラを除けば句末第2モーラ目（無ければ第1モーラ目）を含む音節にアクセントが来る（早田 1985）。久保（2010）では韻律外モーラを仮定しない一般化を行っている。また、ピッチの高低差はあまりない。問題となる「高く平らな」ピッチの実現形の一つとしては、低いところから少しずつ上がっていくようなピッチもあり得る（早田（1985: 20）にもピッチについて「話者の直感としては、句頭からアクセント「¹」の所までだんだんにピッチが上昇していく」という記述がある）。強調が強い場合等に現れる。また、第1音節にアクセントが無い場合は語頭の第1モーラ目は低く始まるが、(1)のような重音節の場合は、第1モーラ目の「い」から高く実現している場合が多い。

² 例文は筆者自身（1967年生まれ、福岡市の生え抜き）の作例である。やや古い形式も含まれ、文体や場面に幅はあるが、すべて筆者の使用語彙・使用表現である。次のインフォーマントに全文チェックしていただいた。お忙しいなか誠意をもってご協力いただいたことに感謝いたします。

井上 美穂 氏 1968年生まれ 福岡市の生え抜き

第2節では感情表出文を概観する。第3節では、この方言の終助詞バイ、ヤを伴う文が感情表出文となり得ることと、バイやヤの語彙的意味（基本機能）との関連を見る。

2. 感情表出文

感情表出文をいわゆる詠嘆文に相当するものとそれ以外の場合に分類し、感情表出文になりづらい文の性質と比較する。

2. 1 いわゆる詠嘆文

アクセントが反映している一般的な平叙文(3)に対し、詠嘆文の(4)には、高く平らなピッチが現れている。

- (3) 今日は朝から頭の[いたか]。なんでかいな。(いた[↑]か)
 (今日は朝から頭が痛い。なんでかな。)
- (4) 今日は朝から頭の[いたかー]。なんでかいな。
 (今日は朝から頭が痛いなあ。なんでかな。)

このように感情表出文には、発話時点での話者の身体的感覚、感情を表す形容詞や願望の「たい」が現れるのが典型である。

- (5) あー、明日から三連休やが。[うれしかー]。(うれし[↑]か)
 (あー、明日から三連休だあ。嬉しいなあ。)
- (6) あらー、夕日の[きれーかー]。ちょっと、こっちに来て見てごらん。(きれー[↑]か)
 (わあ、夕日がきれいだなあ。ちょっと、こっちに来て見てごらん。)
- (7) この部屋は、エアコンが無いけん、[あつかー]。あっちの部屋に行こうや。(あつ[↑]か)
 (この部屋は、エアコンが無いから、暑いなあ。あっちの部屋に行こうよ。)
- (8) 温泉旅行の計画?へー、[よかー]。私は仕事休まれんもんねー。私も[行きたかー]。
 (良[↑]か)(いきた[↑]か)
 (温泉旅行の計画?へー、いいなあ。私は仕事休めないからなー。私も行きたいなあ)
- (9) A: 先生の奥さん、やっぱ、お料理、お上手やねえ。
 (先生の奥さん、やっぱり、お料理、お上手だねえ。)
- B: うん、ほんと、全部[おいしかったー]。またお邪魔しようや。(おいしかっ[↑]た)
 (うん、本当に、全部おいしかったなあ。またお邪魔しようよ。)

共通語の詠嘆文の文末の「な」に近い形式としては「ネ」があるが、その場合、「思う」「言う」等の内部に現れて「～なあとと思う」というような擬似的独話形式のように用いられる。直前のアクセントが実現し、感情表出イントネーションにはならない。(6)、(9)と比較されたい。

- (10) (外が見えるところに一緒に並んで) あらー、夕日の[^{OK}きれーかネー/*きれーかネー]。^{3,4}
 (きれー[↑]か)
 (わあ、夕日がきれいだねえ(*なあ)。)
- (11) A: そこで何しよーと?
 (そこで何やってるの?)
- B: べつにー。夕日が[^{OK}きれーかネー/*きれーかネー]て思うて、ぼーっと見よっただけ。
 (べつに。夕日がきれいだなあって思って、ぼーっと見てただけ。)

³ 以下「*」は、不適格なイントネーションであることを表す。形容詞のカ語尾は古い形式と捉えられるので、井上氏は「きれーやネー」。「きれーやネー」も適格で、「きれーやネー」とくらべて「もっときれいな場合に使う」とのこと。

⁴ 相手に確認する「ネー」も現れ得るが、(10)から(12)では「ネー」が安定的に出てくるようである。

(12) A：先生の奥さん、やっぱ、お料理、お上手やねえ。

(先生の奥さん、やっぱり、お料理、お上手だねえ。)

B：a. うん、ほんと、全部 [OK おいしかったネー/*おいしかったネー]。⁵ またお邪魔しようや。

(うん、本当に、全部おいしかったね。またお邪魔しようよ。)

b. うん、ほんと、全部 [OK おいしかったネー/*おいしかったネー] で、私も今考えよったとこ。

(うん、本当に、全部おいしかったなあって私も今考えてたとこ。)

2. 2 詠嘆文以外

対話の中で感じたことや、相手の意見とは相容れない自分自身の判断等を話し手が一方的に述べる場合にも、この感情表出イントネーションが現れる。2. 1 の典型的な詠嘆文に比べて、完了形、アスペクト形式ヨル(継続)やトル(完了)、蓋然形式ゴター等のついた形が多くなる。共通語訳としては「～なあ」という感覚的な表現の域を超えて、主張する、伝える口調の方がふさわしい場面が多くなる。

①相手への反論、主張、訴え

(13) a. 私やったら、ぜったい [いっぱくするー]。 = (2)

(私だったら、ぜったいー泊するけどなあ。)

b. 私やったら、ぜったい [いっぱくする]。

(私だったら、ぜったいー泊する…。)

(14) a. まじで？昨日？またあの店に飲みに行ったと？なんでー、もー、良かー、誘ってよー、

私も [いきたかったー]。

(いきたかつた)

(まじで？昨日？またあの店に飲みに行ったの？なんでなのよー、もー、いいなあ、誘ってよー、私も行きたかったよー！)

b. まじで？昨日？またあの店に飲みに行ったと？なんでー、もー、良かー、誘ってよー、

私も [いきたかった]。

(まじで？昨日？またあの店に飲みに行ったの？なんでなのよー、もー、いいなあ、誘ってよー。…私も行きたかった…。)

アクセントが実現してピッチの下がり目が現れている (13b) (14b) では、話者の感情を込めた主張とは取れないので、過ぎたことについての話の流れに沿わず、唐突に自分のことについて話し始めたように聞こえてしまう。井上氏の内省によれば、感情表出文 (14a) は、話者には皆と楽しみたい気持ちがあったからこのように言っているのであって、穏和に雑談を進めながら次回はぜひ誘ってねと軽い気持ちで話しているにすぎないが、(14b) だと、対話の流れに沿っていない唐突さから、誘ってくれなかったことを責めているような印象を与え、相手は、ああ行きたかったのか、誘わなくて悪かった、という反応をせざるを得ない、ということである。

次も同様で、感情表出文 (15a) を用いれば「私の意見はこうだが、あなたはどうかと、自然にやりとりが進む」が、(15b) には「笑顔がない感じ」だという内省報告を得た。

(15) (引越し先を探している。ある間取り図を見て、良さそうな物件だと言う相手に)

a. んー、どげんやろーかねー。この部屋は、眺めはよかろーばってんが、冬がねー、

… [さむかろー/さむかろーごたー]。

(さむかろー/さむかろー+ゴター (蓋然))

⁵ 註3と同様に井上氏の内省では、感情表出イントネーションでもOK。「おいしかったネー」(おいしかったね)は「おいしかったネー」よりも「もっとおいしかった場合だと感じる」。50歳代半ばの話者(男性)の使用もあるとのこと報告もいただいた。概して、使用語彙では筆者の方が井上氏より古い形式を残しているところが多く、臨時的な感情表出イントネーションへの許容度は井上氏の方が高い。

(うーん、どうだろうねえ。この部屋は、眺めはいいだろうけれど、冬が…寒いだろうなあ／寒そうなんだよなあ)

- b. んー、どげんやろーかねー。この部屋は、眺めはよかろーばってんが、冬がねー、
… [さむかろー／さむかろーごたー]。
(うーん、どうだろうねえ。この部屋は、眺めはいいだろうけれど、冬が…寒そう。)

(13a) (14a) (15a) は、感情表出イントネーション部分で独言的に自分の考えている内容を見せている。言い換えればこのイントネーションは今考えていることを一方的にリアルタイムでモニターして見せるような機能を持ち、それがこの場合は相手に直接自分の意見を押し付けない（考えているところを見せるだけ）という婉曲的態度としての解釈を生み、ぶつからずにやわらかく意見を伝えるという運用上の機能を果たしていると考えることができる。

②ふだんの感覚を振り返る、捉え直す

発話時の話者の感覚や感情などと同様、ふだんの身体的感覚（習慣、嗜好等）も、話者が一方的に述べるよりほか無い性質のもので、それを話者が改めて確認しながら話している、感じ直しているような場合にも感情表出イントネーションが現れやすい。

(16) (お祭りの夜店でたこ焼きを食べながら)

- A : a. あーやっぱ、たこ焼きて [すいとー]。 (好いとー)
(あーやっぱ、たこ焼きて、好きだなー)
b. 私、小さいときから、たこ焼き [すいとったー]。 (好いとった)
(私、子どもの頃から、たこ焼き好きだったなあ (好きだったんだよねー))
B : あー、そーねー。おいしいもんねえ。
(あー、そーなのー。おいしいもんねえ。)

井上氏によればこのイントネーションで話すと「優しくなる」と感じ、(16) Aの発言は、a, bともに「あなたは？」という態度を含んでいる、という。

感情表出イントネーションは、「話し手が自分側のことを見せるのみ」という態度を伝える機能を持つことから、そこで発言を終えることで、「あなたは？」と発言のターンを聞き手に渡す運用的意味も導かれているものと考えることができる。実際に、次のような場面では、感情表出文 (17a) と、アクセントの実現している文 (17b) で、聞き手に次の発言を促す「あなたは？」というような文の続きやすさに違いが出る。(以下、文末以外の「？」は不自然であることを表す。)

(17) (いま一緒に観ているテレビで、変な癖や習慣の話題が出ている)

- a. ああそういえば私…なんか、よー、電話し始めたらトイレい [いきとーなるー]。^{ok} あんた、そげなこと、ない？ (行きとーなる)
b. ああそういえば私…なんか、よー、電話し始めたらトイレい [いきとーなる]。[?] あんた、そげなこと、ない？
(そういえば私…なんだか、よく、電話し始めたらトイレに行きたくなるなあ (行きたくなるんだよねえ)。あんたは、そんなこと無い？)

③自分の行動を振り返って描写する (驚き)

話し手について起きた事態を描写する文である。

- (18) (平らげた皿を見回しながら) うわー、私、よー [たべたー]。もう、入らん。 (たべた)

(うわー、私、(我ながら驚くほど)よく食べたなあ。もう、入らない。)

- (19) 今考えたら、私、よー [たべよったー]、高校の頃とか。(たべよっ^た:たべ+ヨ^ル(継続)+た(完了))
(今考えたら、私、よく食べてたなあ、高校の頃なんて。)

- (20) あん時は私、もー、[はしったー]！死ぬかと思った。(はしっ^た)
(あの時は私、もう、走ったよー、死ぬかと思った。)

この用例はすべて話者にとって伝えるべき大きな出来事で、そのことについての驚きや場面の再現等、その出来事の中の感情の大きな動きを伝えている。井上氏によれば、食べたこと、走ったこと等について、その話者の「限界、極限」に達していたことがわかる、という。これも詠嘆文と同様に、話者の感覚についての発言とも言える。動作の主体が1人称でなくなると、ここでの「驚き」や「極限」は表せず、感情表出イントネーションは現れない。

- (21) (がんばった太郎のことを報告している) あん時は、太郎くん、よー [はしったー / ^{OK}はしった]！
(あの時は、太郎くん、よく走った(よー)！)

④起きた事態についての感情

否定的な感情が出る場面によく用いられる。

- (22) もー、このスカート見て、ほらー。今そこで、車が通って水がはねたとー。[すかーん]。(好か^ん)
(まったくー…このスカート見てよー。今そこで、車が通って水がはねたの。あーあ、やだー。)

たとえ気分が落ち込んでいて小声でつぶやくような場面であっても、決して「スカートに水がはねたと。すかん」と下がり目が現れることは無い。次の例も慣用的とも言えるほど、安定した感情表出イントネーションでよく用いられる。

- (23) (口論中)
A：やけん、なんでそういうふうにと考えると？ もう、[わからん]。(わから^ん)
(だから、なんでそういうふうにと考えるの？ もう、理解できない！)
B：うわー、[いーきらん]！(言いきら^ん)
(うわー、(そんなこと私はとても)言えない！(=何だよその言い方!))

⑤体験した様子を描写することによる報告

話者が実際に体験したことを述べる形をとり、実際にはその体験から感じ取った一般的性質等にも言及している文である。

- (24) もう、[泣いたー]、あの映画。(泣い^た)
(もう、泣いたよー、あの映画。)

- (25) A：試験は、どげんやったね？
(試験は、どうだった？)
B：うーん、最後の問題やら全然 [わからんやったー]。(わからんやっ^た)
(うーん、最後の問題なんて全然わからなかったよー。)

- (26) A：大相撲観に行って、面白かったね？
(大相撲観に行って、面白かった？)
B：うん、やっぱ、本物のお相撲さんは、[おーきかったー]。(おおきかっ^た)

(うん、やっぱり本物のお相撲さんは、大きかったなあ／大きかったよ～！)

見た映画が感動的であったこと、試験が難易度の高いものであったこと、大相撲の臨場感が素晴らしいことを伝えるにあたり、現場性の高い感情表出イントネーションを用いることが、非常に強調する態度となっているのである。

- (27) 歌舞伎の花道で、役者さんが大きく見えるっちゃん。[よー考えちゃー]。⁶ (よー) (考えてあゝる)
(歌舞伎の花道って、役者さんが大きく見えるんだよね。よく考えて作られてるな～！)

この例も同様に、歌舞伎の舞台の構造について非常に感心する様子を伝えているが、単なる独言的な用法にとどまらず、現場で実際に感心してから今もそれが続いているような印象を与える役割も果たしている。

2. 3 感情表出文になりづらい文

話者の感覚や感情を直接述べる文と比べて、話者が感心している対象、驚いた事態等について描写したり、客観的に判断したりする要素が多くなってくると、感情表出イントネーションは現れないか、現れる場合には上の例ほどは安定せず臨時的なものとなる。⁷

主体が1人称の動作の描写で表していた「驚き」や「極限」の実況中継のような切迫感が、3人称主体の動作文では弱まり、客観性を帯びる。その分、感情表出イントネーションは現れづらくなる。

- (28) ??この子は、まあ、よー[たべたー]。(3人称 完了)
(この子は、まあ、よく食べたなあ)
(29) ??あんだ、また、よー[たべたー]。⁸ (2人称 完了)
(あんだ、また、よく食べたもんだ)

⁶ 井上氏は「よー考えちゃーねー」。

⁷ この方言では、疑問詞疑問文において義務的に高く平らなピッチ(下がり目の無い上昇調)が続く(早田 1985, 久保 2010 他)。

(i) だれが ふこーかに きた? (だれが) (ふこーかに) (きゝた)
(誰が福岡に来た?)

(ii) [だれが ふこーかに きた Φ]
[疑問詞] [補文化辞]

久保(2010)はこれを、次のように動詞、形容詞に付いて名詞化する「ト」(共通語の「の」に相当)と類似した現象として扱っている。すなわち、「ト」については、直前の隣接する要素のアクセント付与を拒む指定[+0アクセント]を持っていると考え(例: いく(行く)+ト→*いくト/ok いくト), 疑問詞疑問文についても同様に、疑問詞から補文化辞までを1つのアクセント句にする操作の後、[+0アクセント]の指定を持つΦによってアクセント付与が拒まれ、(i)が実現する、と分析できる可能性がある、とする。また、そこからそれらと本稿2.1の詠嘆文に相当する感情表出文とが共通に持つモダリティを考える可能性に言及している。

母語話者としての言語直感からもぜひ何らかの共通性を見つけたいところであるが、本稿では、感情表出イントネーションが義務的なものから臨時的なものまでを、連続性をもった同一の現象と見なしており、現段階ではその義務性、臨時性の面で、ト文や疑問詞疑問文と感情表出文との間にはまだ大きな隔たりがあると言わざるを得ない。

イントネーションが臨時的に現れる範囲も、感情表出の度合いや個人差等によるところが大きい。また、井上氏や他にインフォーマルに尋ねた母語話者の知覚の面からも、臨時性の中でも安定した適格性判断が得られる例から揺れがちなものまで、やはり連続性があることがわかる。この方言は語声調的要素が強いという指摘もあるとおり(早田 1985), 若年層に広がる同意要求の平板化も進んでいる上(例: 「あつくない?」), その用法の周辺、相手にあいづち程度しか求めないような意見表明(例: 「あの部屋さー、あついけん いやなんよね」(あの部屋さー、暑いから嫌なんだよね)等)でも、平板化は広く聞かれるようになってきている。

これらの多様な現象の義務性と臨時性等の相互比較や、(35)のような文構造との関わりについての検討は、今後の大きな課題である。

⁸ 井上氏の判定では、不自然とまではいかず、なんとか適格な範囲には入る。「たべたねー」の方がよい、とのこと。

- (30) (平らげた皿を全て見回しながら) うわー, 私, [たべたー]。もう, 入らん。(1 人称 完了) = (18)
(うわー, 私, (我ながら驚くほど) 食べたなあ。もう, 入らない。)

(31) は現場でこの子の食べっぷりを見ながら, あるいは, 見た後でその性質についての驚きを口にして
いるところなので, 一回の出来事についての描写 (30) よりも適格性が上がる。

- (31) この子は, まあ, よー [たべー]。(3 人称 非完了=性質)
(この子は, まあ, よく食べるなあ/よく食べるよ!)

3 人称主体動作完了文で驚き等を表そうとすれば, 次のようにアクセントを実現させた文で, 高低差を極
端に大きくするピッチが現れる。(下線で低いピッチを示し, 極端に上下差がつくことを表す。)

- (32) この子は, まあ, よー [たべた] !
(この子は, まあ, よく食べたよ!)

また, 次のように客観的な判断のつもりで「(1 人称について) 才能が無い」「(3 人称について) 愛想が無い」
と描写している文でも, 感情的に述べる場面であれば, 感情表出イントネーションは臨時的に, また, より
安定的に, 現れ得る。それによって話者が非常に驚いた, 深く考えている, というような態度も伝えられる。

- (33) (友達と並んで歩きながら)
a. (肩を落として, 力無く) あー, もう, 私て, やっぱ, 才能の [な[?]なか / ^{OK} なかー]。 (な[?]か)
(あー, もう, 私って, やっぱり, 才能が無いなあ)

- (34) (居酒屋で, 無愛想な態度で注文を受けた店員について)
A: なんね, いまの店員, あいその [^{OK} なか / ^{OK} なかー] !
(何よ, いまの店員, 愛想が無いなあ! まったく…。)
B: ほんとやねー。
(ほんとだね。)

感情表出イントネーションが現れる句の範囲も臨時的に広がることもある。まず, 博物館の展示と一緒に
見ている相手と話している (35a, b) では, 述語部分に先行したいいくつかの要素においては本来のアクセ
ントが実現している。(35b) は, 客観的な事態の描写をしている文で, ミイラを見たその場で, 一緒に観
ている人と熱く語り合っている場面や, 一人で感心してつぶやいているような場面があり得る。ここでは,
そのように感情を込めた客観的な描写として, (32) と同様にピッチの激しい高低差がつく。

- (35) (博物館のインカ帝国展で, 展示されているミイラを見ている)
a. 何百年も前の人の体が, [めのたままで よーのこっとー]。
(めのたま) (ゝまで) (よー) (のこっとー)
b. 何百年も前の人の体が, [めのたままで よーのこっとー]。
(何百年も前の人の体が, 目の玉までよく残ってるもんだ。)

しかし, (35c, d) のように非常に強い感動や驚きを表すような場合, 先行する要素までが臨時的に一つ
の音韻句となり得る。

- (35) c. 何百年も前の人の体が… [めのたままで よーのこっとー]。
d. 何百年も前の人の体が… [めのたままでよーのこっとー]。
(何百年も前の人の体が, (本当に,) 目の玉までよく残ってるなあっ!)

(35c) (35d) は、ミイラを見たその場で、非常に驚き感心して話している場面や、あるいは博物館を出た後で誰かに観に行くことを勧めるほど熱心に報告している場面があり得る。⁹ 大きな違いは、(35b) の態度よりも話し手の中で「聞き手の不在化」が進んでいる点である。このようにある長さのある句を臨時的に感情表出イントネーションで発話する場合、その前にやや長めのポーズを置くことが多い¹⁰。

次のように、「なんと～な人だ!」というような名詞述語の詠嘆文にも感情表出イントネーションは現れにくい。性質や状態等の属性を含んだ名詞句(例: やさしい人, 大酒飲み)が述語の位置に来る場合、話者が最も描写したい内容を担う語(その属性を示す形容詞や動詞)が構造的に名詞の修飾部や複合語内部の構成素となってしまうため直接性が薄れることに因るものと考えることができる。

- (36) a. (あの人は) ほんと, [^{*}やさしかひとー]。¹¹ (やさし¹か)
 b. (あの人は) ほんと, [^{ok}やさしかひと]。¹²
 c. (あの人は) ほんと, [^{ok}やさしかひとやねー]。¹³
 (本当に, 優しい人だなあ)

(36b) にも大きなピッチの高低差が見られることが多く, これも (32) (35b) と同様, 典型的な詠嘆よりも客観性を帯びたところで驚きや心の動きを強調して表そうとする文の一つであることがわかる。

この方言には, 人を罵倒する表現(例: 大酒飲み)を用いて心情を表す際, 「あの男は大酒飲みだ」というような名詞述語文より, 「あの男はよく飲む」(方言形: 「あのおとこあ, 下一のむ!」) というように活用語で叙述する方が自然である(より方言らしい)という特徴がある。このように, この方言で活用語が述語となって主文の文末に来るほうが話者が感情をストレートに出しやすいという点は, 名詞述語文が感情表出文になりづらい点との共通点と言えそうである。

終助詞のバイ, ヤの付く文も感情表出文になり得る。次節で詳しく見ていく。

3. 終助詞の意味機能との関わり

ここでは, 「感情表出」機能の有無という基準が, 終助詞の意味記述を助けることを示す。

話し手の事態認識, 推論を一方的に見せる働きをその基本機能とする終助詞バイ(共通語の「よ」の用法と重なるところが多い。聞き手がまだ知らないことを教える意味になることが多い), ヤ(独言的に用いられることが多い)のつく文にもこの感情表出イントネーションが現れる。次の例は, バイの感情表出文である。

- (37) この部屋は, エアコンが無いけん, 夏は[あつかバーイ]。びっくりするバイ。
 (この部屋は, エアコンが無いから, 夏は暑い(んだ)よー!びっくりするよ。)

⁹ c, dについては, 井上氏は, ポーズに後続する「目の玉までよー残っとー」の部分だけを, 一人で見ているその場でなら言っているかもしれない, その場を離れて人に勧めるために説明する場合は「よーのこっとーとよね」(よく残ってるんだよね)のように言う, とのこと。

また「ごはん+たべ」る→^{ok}ごはんたべる／^{ok}ごはんたべる」に対し, 「あたし+たべ」る→^{ok}あたしたべる／^{*}あたしたべる」という差が観察されることから, 一時的に許容される音韻句は文構造を反映していると考えられる。この点についての考察は, 今後の課題とする。

¹⁰ 杉藤(1989)では, 談話におけるポーズが声を高めるための準備時間ともなっており, 強調の前にポーズを置くことも関連があると述べ, ポーズの時間とイントネーションが深く関わることを指摘している。

¹¹ 井上氏: aは独り言でなら言うかもしれない。bもよいが, cのように言うことが多い。

¹² この方言では, コピュラの「ヤ」は単独で文末に立つことはできない。

(i) 12時か。もうすぐお昼ご飯*ヤ／^{ok}ヤガ(等)。

(12時か。もうすぐお昼ご飯だ)

(ii) ^{ok}もうすぐお昼ご飯ヤけん, ちょっと片付けろ。

(もうすぐお昼ご飯だから, ちょっと片付けよう)

「ヤ」の単独使用は, 一部, 若年層を中心に聞かれることもあるが, まだ現段階ではメディア等の影響による関西的な響きとして受け取られている範囲である。ヤが単独で現れないことから, 名詞句で終わる文形はいわゆる体言止めの用法より広く用いられており, 何らかのゼロ形式のモダリティ要素を認めることもできるが, ここでは議論しない。

¹³ 臨時的に「やさしかひとやねー」も現れる。

- (38) この子は、まあ、よー [たべるバーイ]。
(この子は、まあ、よく食べるよー！)
- (39) 何百年も前の人の体が目の玉までよー [のこっとーバーイ]。行ってみてん、インカ帝国展。
(何百年も前の人の体が目の玉までよく残ってるんだよ！行ってみてごらん、インカ帝国展。)
- (40) あの人ほんっに、[やさしかひとバーイ]。
(あの人ほんっとうに、優しい人だよー！)

バイは現在の福岡市博多方言の中では「カ語尾」と並んでやや古い形で、現在では共通語の「よ」に置き換え用いられる場面が多いが、感情表出イントネーションは維持されている。

- (41) あの人ほんっ、[やさしいひとヨー]。
(42) ほんっ、[やさしいひとヨー]、あの人。

終助詞の意味機能を観察するにあたり、次のように考える。人間の言語使用は、「話し手の認識」が外的な刺激や自己の推論等何らかの要因で変化し、それを「伝える」ために「発話」という行為に至り、発話が「聞き手」への大きな刺激となって「次の推論」が促され、その繰り返しによって対話を形成している。バイの使用については、概略的に次のように捉えることができる。

- (43) 話し手が(観察・推論によって)事態Pを認識→ 発話「Pバイ」 → 聞き手がPと認識
〈話し手の知識状態が変化〉 〈聞き手の知識状態が変化〉

具体例を(43)と照らし合わせ、発話「Pバイ」に至るまでの話し手の知識状態の変化を考える。

- (44) (運動会の朝に窓を開けて、残念そうに) ああ、雨の降りよーバイ。
(ああ、雨が降ってるよ…)
- (45) あー、もう、こらあ、バスには間に合わんバイ。
(ああ、もう、これは、バスには間に合わないよ／間に合わないな)

(44)(45)の例において、(43)の「観察・推論によって事態Pを認識」とはそれぞれ(46)(47)のようになる。

- (46) 観察：外を見て
事態P：雨が降ってきたこと に
認識：気づく

- (47) 推論：これから乗ろうとするバスの時刻と、自分(達)のいる位置とを照らしあわせて
事態P：これは間に合わない と
認識：考える

「伝える」ために起こす「発話」は言語使用の大前提であって、個々の終助詞の意味機能の中に「聞き手に知らせる、教える」という機能があると見なす必要は無く、必要があって伝える部分は「発話」自体が担うところと考える。

すなわち、対話の前提として聞き手と共有している文脈((44)運動会の日のお天気がどうなるか、(45)バスに間に合うかどうか、という話題)があるがゆえに、「外を見る」という「観察」や、「バスの時刻と自分(達)の位置とを照らし合わせる」という「推論」が起きているのであり、「Pがそこから得られた話し手の認識(事態Pに気づいたこと、事態Pと結論づけたこと)であると聞き手に提示する」のが発話「Pバイ」の働きだと考えることができる(坪内(2013))。

言い換えれば、「Pバイ」と発話される場面(バイが使用される場面)とは、その発話者が対話参加者の

中で初めて事態Pと認識した場面であるので、結果的にその発話が、聞き手にPと知らせる、教えるという運用的な機能を果たしていることになる。

従って、バイの基本的な機能としては、話し手の認識についてだけ定義していればよく、聞き手の認識について規定しておく必要はない。この、バイの「話し手の認識したことを提示」する性質は、感情表出イントネーションの「話者の判断を一方的に述べる」性質と相通ずる。

終助詞バイと発話について次のようにまとめることができる。

| | |
|---------|-------------------------------|
| 終助詞 バイ | 「(観察・推論によって) 事態Pを認識した」ことを示す標識 |
| 発話 (行為) | その内容を伝えようとする話し手の意図を聞き手に示す行為 |

上の(45)のようなバイは、次のように必ずしも聞き手が想定されない独言的な用法に近い場面にも現れる。

- (48) 昨日は家出るとが遅くなったもんやけん、こりゃあもうバスには間に合わんバイと思うてから、仕事場までタクシーで行ったっちゃん。
(昨日は家を出るのが遅くなったものだから、これはもうバスには間に合わないぞと思って、仕事場までタクシーで行ったんだよね。)

上に見てきた例では、文末((48)では従属節末)の述語句のピッチは次のように実現する。(バイには前アクセントが挿入される。)

- (49) [降りよーバイ] (ふりよー + ㇿバイ)
(50) [間に合わんバイ] (まにあわㇿん + ㇿバイ)

更に、次の要素を加えて考察を進める。

| | |
|------------|------------------|
| 上昇イントネーション | 聞き手に次の反応(推論)を促す。 |
|------------|------------------|

上昇イントネーションを「↑」、非上昇イントネーションを「↓」で表すと、発話「Pバイ」は次のような役割を果たす。

- a [発話「Pバイ↓」] 話し手が「(事態の観察・推論によって) Pを認識した」ことの宣言。
b [発話「Pバイ↑」] 話し手が「(事態の観察・推論によって) Pを認識した」ことについての、聞き手への次の推論の促し。

次のような使い分けの例を見てみよう。

- (51) a. この部屋は、エアコンが無いけん [あつかバイ]。 (あつㇿか + ㇿバイ↓)
b. この部屋は、エアコンが無いけん [あつかバイ]¹⁴。 (あつㇿか + ㇿバイ↑)
c. この部屋は、エアコンが無いけん、[あつかばーい]。

(51a) は話し手が部屋の様子を見回して、エアコンが無いという理由で(推論)、この部屋が他の部屋よ

¹⁴ 便宜上「バイ」と表記しているが、なめらかに上昇する二重母音である。また、「あつかバイ」とバから音節全体が高いピッチもあるが、ここでは議論しない。音節全体が高い場合も、聞き手に次の推論を促す上昇イントネーションの一種と考えられ、bと同様、まだ事態を認識できていない聞き手に知らせて次の推論をさせたいのだが、「(この部屋は暑くなるんだよ、) そんなところにいて大変なことになっても知らないよ」とやや突き放し、だからどうするべきだと思ふ?と次の推論を促すような態度となる。大人が優しく子どもに話すような場面が考えられる。後述の終助詞タイにも同じピッチが現れ、やはり「知らないよ」という意味をもった態度になる。

り暑いのだ、あるいはやがて暑くなる（事態P）と判断し、周囲の人達に知らせている。(51b)は、そのような判断（推論）もしくは実際の経験（観察）による認識から、この部屋は暑い（事態P）と知らせて、まだそれをわかっていないように見える聞き手を誘って場所を移動しようとしている。

それに対して、感情表出イントネーションを伴う(51c)は、話し手が一度この部屋の夏の暑さを経験し（観察）、それが予想以上のものだった（事態Pに驚いた）という感情を含めて伝えているところである。

次のように2人（A, B）でCを説得しようとするような場合、Aの発言内容を「そう」で受けたBは、Aと同じことを言っている気持ちではあるが、感情表出イントネーションにはなりにくい。

- (52) A：この部屋はエアコンが無いけん、[あつかバーイ]。勉強部屋にするとは、やめとき。
 （この部屋はエアコンが無いから、暑い（んだ）よー！勉強部屋にするのは、やめておきなさい。）
 B：[?][そうバーイ]。あんた、Aさんの言うこと聞いとき。
 （そうだよー！あなた、Aさんの言うことをきいておきなさい。）

Bの発話は既にAの発言内容を受けている時点で、感情表出より一段階、客観性を帯びていると考えられる。

ここで、バイとの比較のために、一例として終助詞タイのイントネーションを見てみる。タイの基本的機能は次のように定義される。

〔終助詞 タイ〕「推論Pを動かしがたい真実（妥当、変更不可）と認識した」ことを示す標識

発話「Pタイ」は、話し手がPを自分でも変えることのできない真実として扱う態度を聞き手に示すものである。タイもバイと同様、前アクセントが挿入される¹⁵。

- (53) (お隣さんが訪ねてきて、町内の寄り合いで使える場所を探している、あなたのお宅の部屋の一つを使わせてほしい、と言われた。なんとか協力したいが、今いるこの部屋はあいにくその日お客さんが泊まるので使えない。ではもう一つのあの部屋は？と尋ねられて)

あー、あの部屋は、こんどは、エアコンが無いけん、暑かタイ↓。それでもよければ、使うてもろうてよかけどね。

(あー、あの部屋のほうは、エアコンが無いから、暑いんだよ（どうしようもないんだ）。それでもいいなら、使っていただいてかまわないけどね。)

タイはバイとは異なり、単なる「観察」で事態Pを知る場合には用いられない。

- (54) * (偶然、窓の外を見て) ああ、雨の降りよータイ。
 (ああ、雨が降ってるよ)

タイの使用には必ず、それが話し手にもコントロールできない真実として既にあったものと捉え直すような場面が必要である。「雨が降っている」にタイをつければ、聞き手との対話（推論）に必要なこととしてそれを「動かせない真実と見なした態度」となる。

- (55) たしかに、あんたの言うごと、いま雨の降りよータイ。降りよーばってんが、いま出かけないかんもんは、いま出かけないかんっちゃけん、しょんないタイ。

¹⁵ 早田（1985）では、「バイ」「タイ」。筆者の文法では「バイ」「タイ」。

(確かに、あなたが言うとおりの、今雨が降ってるよ。降ってるけど、今出かけないといけないものは今出かけないといけないんだから、しょうがないよ。)

このような、Pを動かしがたい真実、話し手のコントロールを越えた事態だとする認識と、「感情表出」とは相容れない。従って、タイ文には感情表出イントネーションは現れない。

- (56) *この部屋は、エアコンが無いけん、[あつかターイ]。
(この部屋は、エアコンが無いから、暑い(んだ) よー！)

次に、終助詞ヤの基本機能を見てみよう。

終助詞 ヤ 「事態P／推論P／要求Pを提示する（聞き手に次の推論を求めない）」標識

ヤはその基本機能において、バイやタイのように話し手の認識の仕方について言及はしない。「発話」は原則として聞き手に次の推論を促すが、ヤの持つ基本機能は、「Pを見せるのみ」で、むしろ積極的に「それについて次の反応はしなくてよい」と止めるものであると考えられる。その性質は、次に見るように、ヤの接続する活用形の多様さにも現れている。

聞き手の反応を求めないヤは、話し手が自分の感じたこと（聴覚や嗅覚などによる知覚、浮かんだ考え）をただ見せる場面で多く用いられる。それが運用面では独言的な態度となり、その話し手からの一方的な見せ方が、感情表出イントネーションの性質と重なるところとなる。

- (57) (料理の材料の混ぜ方を尋ねる)
A：こんぐらいで、よか？ままだ混ぜる？
(このぐらいで、いい？まだ混ぜる？)
B：あー、こんだけ混ぜとら、[よかろーヤ]。(よかろー)
(あー、これだけしっかり混ぜていけば、いいだろう／いいはずだ／いいだろうと思うよ)
- (58) (贈り物を値踏みしている) えらい立派な包みやね。こらあ、[たっかつとろーヤ]。
(高かつとろー：高かつ(た) + トール(完了))
(やけに立派な包みだね。こりゃあ、高かつただろうな／高かつただろうと思うよ。)
- (59) いりこば こげなとこい置いとったら、猫の[とっていきーヤ]。(取っていきー)
(いりこをこんなところに置いていたら、猫が取っていきだろうな(早くしまおう)。)
- (60) A：もう飲み会始まるとに、山田くん遅いね。来んとかいな。
(もう飲み会始まるのに、山田くん遅いね。来ないのかな。)
B：あの人はカラオケやら好かんけん、今日は[こんめーヤ]。(来んめー)¹⁶
(あの人はカラオケなんか好きじゃないから、今日は来ないだろうな／来ないと思うよ)

上の例は全て推量形に「ヤ」が接続した形で、安定的に感情表出イントネーションが現れる¹⁷。ヤは他の終助詞に比べて接続できる範囲が広く、次の例は終止連体形、命令形に接続する例である¹⁸。終止連体形(事

¹⁶ 形式は、否定形「来ん」＋否定推量「メー」の二重否定形。意味は単純否定。

¹⁷ 推量形「ヤロー」だけは、前アクセントが現れる。

(この手紙の宛名は苗字だけで下の名前が書いていないが、きっと)

(i) これ、[あたしあてやろーヤ] (あたしあて + りヤロー + ヤ)

(ii) *これ、[あたしあてやろーヤ]

(これ、私宛だろうな／私宛だろうと思うよ)

しかし井上氏の内省では(i)(ii)ともに適格。強調してはっきり言おうとすると(i)、ふだんは(ii)も適格とのこと。

¹⁸ この接続形はかなり古い形ではあるが、じゅうぶん理解語彙、理解用法の範囲であるので、参考のため挙げる。

態P)に接続する(61)はやはり感情表出イントネーションで発話されるが、命令形(要求P)に接続する(62)は感情表出イントネーションは現れない。これは、話し手の感覚等を越えて相手の行動に直接言及する場合で、話し手側が一方的に見せる感覚や判断への言及は無いためである。

(61) 新聞の字のかすむが、あー目の [わー^ーな^ーってきよ^ーるヤー]。

(わー^ーな^ーってきヨ^ール： わー^ーな^ーってく^ーる+ヨ^ール (継続))

(新聞の字がかすむな…ああ、目が悪くなってきてるなあ)

(62) 早よ [OK かえ^ーって来んしゃいヤ/*かえ^ーって来んしゃいヤ]。

(かえ^ーって来んしゃ^ーい)

(早く帰ってきなさいよ／帰ってくるのよ (わかった?))

(61)に当たる筆者の最もよく使う形は「目のわー^ーな^ーってきよ^ー」(きよ^ー=きヨ^ール)ではあるが、やはり感情表出イントネーションは維持されている。井上氏の内省も同様である。

ヤの基本機能に、もし「聞き手の反応を求めない」ことの他、話し手側の認識や態度などについて何かを規定してしまうと、この「命令形(要求P)+ヤ」に感情表出イントネーションが現れないことの説明が非常に煩雑になる。従って、ヤは、接続するそれぞれの述語の活用形が導く多様な「事態P」「推論P」「要求P」を、「発話」によってただ見せるだけであって、「聞き手には次の反応を求めない」ものであることを規定しておけばよいと考えられる。

むすび

本稿では、福岡市博多方言において一方的に話し手の感覚や判断を述べる場合に本来のアクセントを実現させず高く平らなピッチで発話される文を感情表出文と名付け、その感情表出イントネーションが安定的に現れるものから臨時的なものまで、その広がりを見た。また、感情表出イントネーションが現れるかどうかを、話し手の態度を表す多様な終助詞の意味記述を助ける基準として見ることも示した。

本稿のデータは筆者自身と同年代のインフォーマントの許容する範囲に限ったが、他の世代との比較は今後の課題である。

参考文献

- 大曾美恵子 2005「終助詞「よ」「ね」「よね」再考 - 雑談コーパスに基づく考察 -」『言語教育の新展開』ひつじ書房
- 川上 蓁 1963「文末などの上昇調について」『国語研究』第16号 國學院大學国語研究会 大和文庫
- 久保智之 2010「福岡方言における動詞・形容詞と疑問詞疑問文のアクセントに関する覚え書き」『文学研究』107
- 杉藤美代子 1989「談話におけるポーズとイントネーション」『講座日本語と日本語教育 2』明治書院
- 田窪行則 1992「談話管理の標識について」『文化言語学 - その提言と建設 -』文化言語学編集委員会 (編) 三省堂
- 坪内佐智世 2013「伝達・確認の終助詞の意味記述についての「発話」 - 福岡市博多方言の終助詞「バイ」について -」『日本語学会 2013 年度秋季大会予稿集』日本語学会
- 日本語記述文法研究会 (編) 2003『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 橋本修 1992「終助詞「ね」の意味の型とイントネーション」『日本語学』vol. 11 明治書院
- 蓮沼昭子 1996「終助詞「よ」の談話機能」『言語探求の領域』大学書林
- 早田輝洋 1985『博多方言のアクセント・形態論』九州大学出版会
- 森山卓郎 1989「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育 1』明治書院

